

## 37. 本学のICTリソースを活用した新たな教育技法の試行

基本医学 情報教育部門（兼務：情報基盤センター）

山下真幸，坂東宏和，上西秀和，坂田信裕

近年，本学の教育において，ICT（情報通信技術）を積極的に利活用した取り組みが多数行われている。また，世界的な潮流となっている授業時間の短縮が来年度より医学部で実施される予定である。本学においてICTをどのように授業で活用できるかを検討するため，LMSと無線LAN（DARWiN）の整備・利用状況を概観し，現状でどのような教育手法が導入されているか，また今後導入可能かを検討した。

LMSの利用は2011年4月の導入以来，利用授業数，ログイン数ともに着実に増加しているが，今年度は特に増加が著しい。LMSによる資料配付の利用率が高いこと，導入以来毎年行ってきた学生へのアンケートでは，一貫してLMSへの利用に対して肯定的な回答が多いことから，学生においてはLMSの利用は積極的に行われており，抵抗感も薄いことが示唆された。

無線LAN（通称DARWiN）は，2010年9月にサービスを開始し，2013年3月以降は大学のほぼすべての講義室で利用可能となった。利用数は一貫して増加しており，その大半を学生が占めている。2014年11月時点では，全学生の7割強がDARWiNを利用している。

以上の結果から，LMSと無線LANを用いた授業を，PCのある教室だけでなく一般教室でも行い得る環境が整備されてきている。すでに実施されている授業でのICTを用いた取り組みには以下のようなものがある。1. 出欠管理，2. 小テスト，3. レポート提出，4. LMSの掲示板機能を用いたディスカッション，5. 反転授業。反転授業に関しては，開始したばかりでありその効果に関してはデータの蓄積が待たれる。

## 38. 3歳健診での肥満ハイリスク群への介入の試み

<sup>1)</sup>小児科，<sup>2)</sup>大田原市役所子ども幸福課，

<sup>3)</sup>那須赤十字病院

市川 剛<sup>1)</sup>，市川純子<sup>1)</sup>，藤田律子<sup>2)</sup>，  
田口仁美<sup>2)</sup>，阿久津真弓<sup>2)</sup>，白石奈緒美<sup>3)</sup>，  
松田千鶴<sup>3)</sup>，有阪 治<sup>1)</sup>

【目的】肥満は，世界中で爆発的に増加しており，日本でも社会問題となっている。また小児期・成人期の肥満の原因としてBMI rebound（乳児期に上昇したBMIが一旦減少した後に増加に転じる現象：一般には5歳～6歳）が早いことが，一つの原因であることが受け入れられている。早期BMI reboundの簡便な代替指標として，1歳半のBMIと3歳のBMIを比較してBMIが上昇していることが有用であることを我々は提唱している。

【方法】栃木県大田原市では2013年4月より3歳健診でBMIが一定以上上昇している児を肥満や他の代謝異常のハイリスク群として介入する試みを行っており，その結果を報告する。

【結果】3歳健診受診者544人中，34人（6.3%）がハイリスク群の判定となり，そのうち17人が那須赤十字病院を受診した。受診者の内，52.9%は既に肥満傾向であり，肥満度は平均17.1%，BMIは平均18.1であった。多くは，両親のどちらかが肥満であり，生活上の問題点を抱えていた。栄養士による栄養相談，臨床心理士による面接，保健師による家庭訪問などを行うことで，3ヶ月後には平均肥満度は13.2%（平均BMI17.4）と平均で肥満度が3.9%改善した。

【考察】問題点としては，受診率がやや低いことである。受診拒否の児の多くは低出生体重で生まれ，家族は体重増加，3歳での体格の改善（BMI増加）を好感していることが多い。これらの児を擬陽性として捉えるべきか，ハイリスク群として対応すべきかは今後の課題である。

【結論】3歳健診での肥満ハイリスク児への介入は，健診の受診率が高い日本では肥満予防の第一歩として有用と考えられ，費用対効果の面からも今後広まっていくことが期待される。